

出雲市歴史博物館

大井谷Ⅰ遺跡
大井谷Ⅱ遺跡

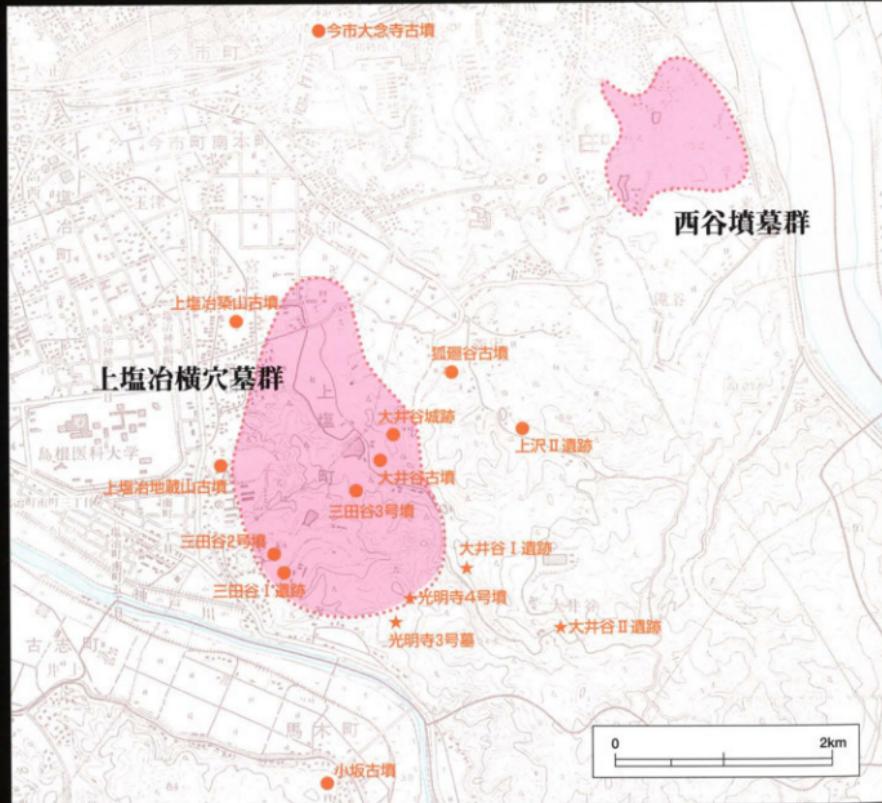
光明寺3号墓
光明寺4号墳



2001年3月
出雲市教育委員会

斐伊川放水路事業地内の 発掘調査

斐伊川放水路事業は、放水路を開削して斐伊川の水を神戸川へ流す壮大な計画として平成6年に本格的にスタートしました。事業地内は以前から埋蔵文化財の大密集地として知られており、事業に伴ってこれらの文化財調査が行われています。出雲市教育委員会では、平成8年度から調査を開始し、これまでに全国最大規模の横穴墓群として知られる上塩治横穴墓群をはじめ、多くの遺跡を調査してきました。特に、平成10年度に調査を実施した光明寺3号墓は、マウンドを伴った火葬墓という全国的にも特異な遺跡であり、建設省(現:国土交通省)の協力により、遺跡の現地保存を実現することができました。この冊子では、出雲市教育委員会で平成10年度以降発掘調査をした遺跡のうち、主な遺跡について紹介しています。調査によって得られた資料からは、出雲市の南部丘陵地がかつてどのように利用され、当時の人々がどのように生活をしていたのかを知ることができます。



斐伊川放水路事業地周辺の遺跡

大井谷I遺跡

ooiodani



大井谷I遺跡から出雲平野を望む

大井谷I遺跡は、平成10年度に発掘調査を実施しました。この遺跡は出雲市の南東、中国山地から派生した丘陵斜面の標高90~71m付近に立地しています。調査では、溝やピット、加工段など多くの遺構がみつかっています。



遺構の検出状況



▲ピット状遺構

大井谷I遺跡からは20のピット状遺構がみつかっていますが、そのほとんどで炭化物を多く含む層が確認されています。遺構内から出土した石も焼けて変色していることから、護摩供養に使用したものではないかと考えられています。時期は、上層の出土遺物から判断すると12世紀~14世紀頃にかけてのものと考えられます。

▼加工段

丘陵斜面の地山を人為的に加工し、段を設けて 10×10 mほどの平坦地を作り出しています。ピット状遺構とは同じ時期に築かれていることから、護摩供養をする際の祭祀場ではないかと考えられています。



大井谷 II 遺跡

大井谷 II 遺跡は、平成10年度から平成12年度にかけて発掘調査を実施しています。出雲市上塙治町大井谷の谷奥に位置し、遺跡の北には「出雲鏡」や「雲陽誌」という古い文献に781年建立と記されている般若寺が現在も残っています。遺跡からは中世に築かれた掘立柱建物跡や石段遺構、池状遺構など多くの遺構がみつかり、おびただしい数の土師器とともに陶磁器や木製品、鉄製品などが出土しています。このなかには仏具も多く含まれており、この遺跡は寺院に関連する生活跡と推定されます。

大井谷 II 遺跡調査区位置図



階段状遺構

北北西方向へと向う幅5m以上の大規模な階段状の遺構です。時期は判断できませんが北方には般若寺があることから、旧参道であった可能性もあります。



とりべ

寺院関連遺跡からは精錐圓連の遺物が出土することがあります。当遺跡から出土したとりべには内側に銅が付着しており、付近で製錠を行っていたことがわかります。



フイゴの羽口

鉄や銅を生産していたことがうかがえるフイゴの羽口**が出土しています。遺跡からは鉄製品や鉄滓などが多く出土していることから、製錠または製錠を行っていたことがわかります。

*窓に風を送るための送風装置 **フイゴから炉に酸素を送るためのパイプを熱から守るもの



池状遺構・石敷建物跡

ともに大きく破壊されていますが、池状遺構は帯状に伸びるものと考えられます。石敷建物跡は池に石を積き詰め、基礎を造って建物を建てていたようです。遺構北側には建物の内部施設と考えられる方形状の石畳が残っています。



石垣状遺構

調査区の東端で50~70cm大の石を一列に並べた遺構がみつかりました。南側に最大の石を置き、そのまわりを小口の石で覆っています。土留と敷地の区画を示すものと考えられます。



石段遺構

平坦な石を段階状に積み上げ、下部では石段路状にしています。15世紀頃に造られたと推定され、石段の向かう先には同時期の掘立柱建物跡が検出されています。建物跡が本堂と推定されることから、寺の参道である可能性があります。



古瀬戸燭台

京都以西では應川寺旧境内遺跡(京都)、草戸千軒町遺跡(広島)に次いで3例目のものです。遺物の時期は14世紀末から15世紀初頭と考えられています。



杓子状木製品

写真的木製品はしゃもじとして使われていたと考えられます。付近からは、魚骨、獸骨、炭化米などの骨の生ゴミが出土しており、厨房や食房があった可能性があります。

光明寺3号墓

光明寺3号墓は、平成10年に発掘調査された遺跡です。この調査によって、島根県で5例目となる石棺（石製骨蔵器）が発見されました。この中には火葬された人骨が納められており、当時、この辺りである程度身分の高かった人の墓ではないか、と考えられています。時期としては8世紀の初め頃と考えられ、日本に火葬が取り入れられてまもなくの頃に築かれた遺跡と推定されます。また、火葬墓としては珍しく、小高く盛り上げられたマウンドがあったことから、この時代の葬制の解明への手がかりとなる遺跡となりそうです。



マウンド周辺斜面

マウンドは直径約8mの円形を呈していますが、調査の結果、元は方形であったことが分かりました。また、マウンド部分と同じように、周辺の斜面にも人工的に人頭大の石が不規則に置かれていたことが分かっています。



主体部

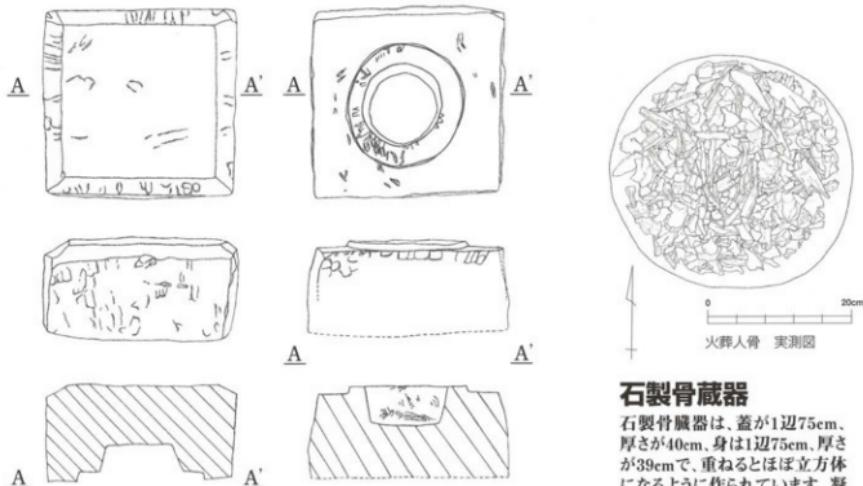
マウンドのほぼ中央には石製骨蔵器が埋納されていました。石製骨蔵器の周囲には炭が大量に散かれ、内部への湿度の侵入を防ぐ役割をしていたものと思われます。石製骨蔵器の1辺は磁北と同じ方向を示しており、方角を意識して埋納されたと考えられます。



火葬人骨

火葬された人骨は、ほとんどが小さな破片となっていました。これは熱によって割れたうえ、納骨の際、さらに小さく割られた可能性があります。この人骨は、鑑定の結果、40歳代の熟年男性のものであることが分かっています。骨の部位はほぼ全身にわたっており、小指のような小さな骨まで丁寧に拾われ、埋葬されています。

なお、この人物を特定できるような墓誌は発見されていません。



石製骨蔵器 実測図 S=1/20

石製骨蔵器

石製骨蔵器は、蓋が1辺75cm、厚さが40cm、身は1辺75cm、厚さが39cmで、重ねるとほぼ立方体になるように作られています。凝灰質砂岩で作られており、全体にノミのような工具で丁寧に加工した痕が残っています。蓋と身はほぼひつり合うように作られており、内部には土砂の流入などではなく、密閉された状態が保たれていました。



光明寺3号墓 石製骨蔵器

【光明寺3号墓】

光明寺3号墓の周辺では、石壠（石製骨蔵器）が3ヵ所、4基見つかっています。島根県内でこれまでに5基が発見され、うち1基が半径3km以内に集中しており、この地域が墓域としての役割を果たしていたものと考えられます。



小坂古墳 石櫃

【小坂古墳】

刈山古墳群の1つで、横穴式石室の中に石櫃が納められています。中央の球形に彫り込まれた部分には銘文が付着していることから、おそらく銅製の蔵骨器が納められていたと思われます。石室からは奈良時代の須恵器も出土していることから、古墳時代に埋葬が行われた後、さらに石櫃を納めて再利用したと考えられます。



【菩澤古墳】

昭和23年に開墾中に発見されたもので、直径が70～80cmある大型の石製骨蔵器です。中央の僅んだ部分に骨が納められていました。他のものに比べると、全体的に粗い作いで自然石に少し手を加えた程度のものです。現在は大社町で保管されています。



菩澤古墳 石製骨蔵器

【朝山古墳】

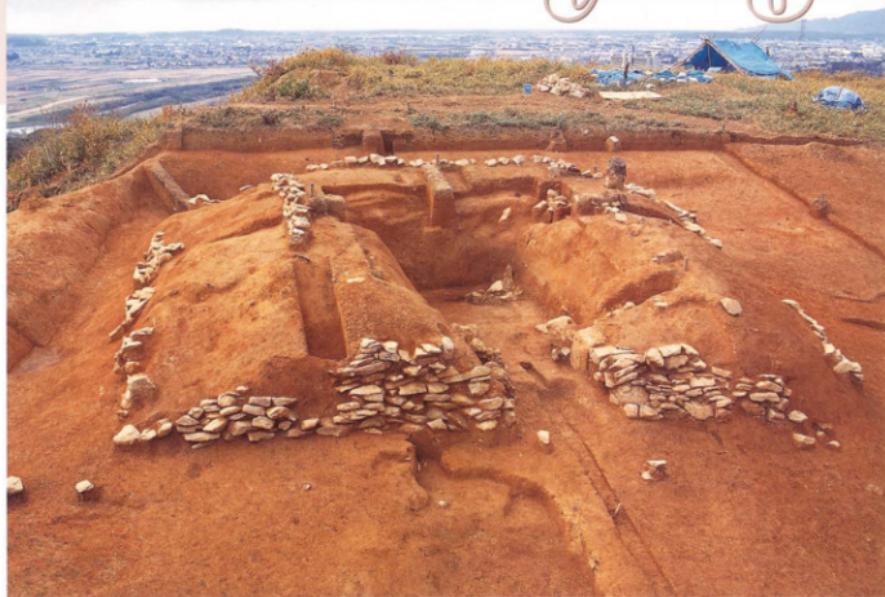
道路工事の際に発見されたもので、発見当時は2つあり、うち1つは現地に埋め戻されています。1辺が40cmの正方形で、家形に加工されています。全体的に丁寧な作いで、加工した工具の痕はほとんど分かりません。出雲市教育委員会で保管しています。



朝山古墳 石製骨蔵器

光明寺4号墳

光明寺4号墳は平成10年度に発掘調査を実施しました。この古墳は標高約90mの出雲平野を見渡せる高い場所にあり、古墳時代終末期に築かれたと考えられます。



光明寺4号墳 全景

○光明寺4号墳の形と大きさ

墳丘は1辺10mの方墳です。その形はきちんとした正方形に整えられ、その周辺は平たい石を積み上げて石垣状にしています。これらは「外護列石」と呼ばれ、墳丘の崩れを防ぐためと外観を見栄えよくするために造られたと考えられます。また、この外護列石は墳丘の上にも残されていることから、1辺5mの墳丘がもう1段設けられており2段築成であったと考えられます。そのため、発掘調査段階での墳丘の高さは約1mでしたが、古墳築造当時は現在よりも更に高く築かれていたことでしょう。

○周壕の役割

古墳の西側と南側では周壕を確認することができました。幅は広いところで3.5m、狭いところで1m、深さは南西側で1mを測ります。この周壕は、墳丘の高さを高く見せると同時に雨水を低い方へと流す排水溝としての役割があったと考えられます。



西側 周壕



内部主体

○古墳の主が埋葬された場所

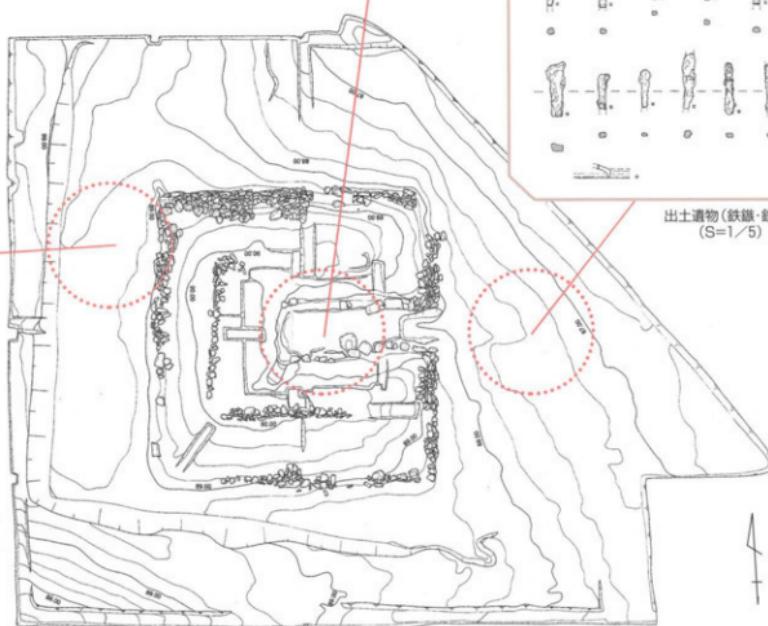
古墳の主を埋葬していた場所は後世の盗掘により大きく壊されていました。この埋葬主体は凝灰岩の切石が2点発見されているため、東へと開口する小型の横穴式石室が造られていたと考えられます。また、床面には側壁を乗せたと考えられる平たい石や、奥には奥壁を立てたと思われる溝がみつかりました。しかし、盗掘の際に石室の石材はほとんどが持ち出されてしまっており、そのほとんどが残っていませんでした。

○光明寺4号墳はいつ造られた?

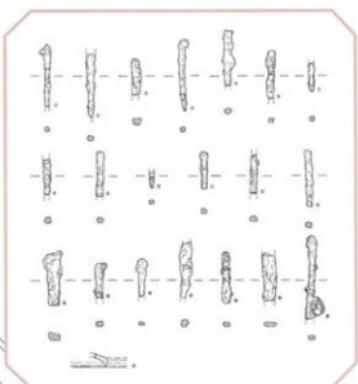
この古墳からは出土遺物がほとんどなく、いつ造られたかはっきりはわかりません。しかし、横穴式石室が凝灰岩の切石で造られていたと考えられることや、古墳の規模・外護列石の存在などから古墳時代終末期(7世紀代)と考えられます。

○出土遺物

古墳の東側から鉄製品が出土しました。盗掘の時に外へと掻き出されたものでしょう。これらは鉄鑓や鉄釘と考えられます。鉄釘は古墳の主を埋葬した時の木棺に使用されたものでしょうか?



光明寺4号墳 墳丘測量図 (S=1/150)



出土遺物(鉄鑓・鉄釘)
(S=1/5)



大井谷Ⅱ遺跡 A区出土遺物

出雲市斐伊川放水路発掘調査概報 2

出雲市歴史博物館

平成13年(2001)3月

編集・発行 出雲市教育委員会

出雲市今市町109-1

印刷・製本 (有)ワン・ライン

出雲市塩治町1173-1